

広島俳句倶楽部

令和七年三月作品集

「春の雪」

高尾ひとみ

立春を過ぎて、寒波が来た。ちょうどその頃、小さな旅に出た。嬉しいことに、予想もしない雪が降った。二十代のころは、よく恐羅漢にスキーに行った。転んで新雪に突っ込んでいくのが楽しかった。スキーはだいが前に止めたが、今も雪は好きだ。歩きたいのは、人の足跡のついていない真っさらな雪。小さな足跡ならよし。犬か鹿か、もしかしたら兎かと考えながら、転ばぬようにしつかり雪を踏みしめて歩く。私の旅は、雪の旅となった。

冴返る朝に旅の支度せり

旅立ちに嬉しき春の雪となる

瀬戸はけふ霞の海となりにけり

トンネルを出るたび違ふ春の雪

閑かさや淡雪のますぐに降れる

春雪の積みて梅ヶ枝薔みをり

竹林を吾へとしづり春の雪

春雪の道にけものの跡辿る

踏みをるは降りしばかりの春の雪

春雪に吾が足跡を確とつけ

《作品鑑賞》

ふじ女

寒波や大雪の悲壮なニュースが続くけれども、雪景色を見慣れない瀬戸内の住民には、単純に雪は美しく心洗われるものでもあります。雪の喜び、自然の遊びと危険を、雪の旅として満喫されたのですね。大人の童心が感じられ、原曲がチェコ民謡であるらしい、昭和？の童謡『雪のおどり』（こんこんこん、ふれふれゆーきー♪）を思い出しました。

竹林を吾へとしづり春の雪

しづる、とは、日常会話では使う機会がない言葉ですね。広告業界で、シズル感、とはみずみずしいという意味で、語源、sizzle（ジュージューする（ステーキなど））だそう。この句は冷たい方のシズル感ですね。

春雪の道にけものの跡辿る

けもの、なのに、跡をつけてみたいような可愛さです。

春雪に吾が足跡を確とつけ

アナと雪の女王のようです。かっこいいです。この作品全体が、旅でつくった雪のお城に見えてきました。

枯木山古墳へ下る道分かれ

枯葉踏む音のしてゐる古墳かな

ひとしきり雪降れば鳴く鴉かな

北風に立つて古備線待ちにけり

梅探るゆふべの雨も今は止み

探梅は大曲りする道が見え

冴え返る駅に古備線待ちにけり

春の朝まづ見えてくる向う山

初音してすぐあちこちや大河原

春雨の雲上がりゆく白木山

佐保光俊

夕暮れて冬至の雨の止みにけり

臘梅にあれこれ母のこと思ふ

このあたりいつも鶉の啄めり

寒木瓜に昼の日差の燦々と

そのあたりよく日の差して寒椿

楽しきは降りしばかりの雪を踏み

詠みをれば雪のひと片匂帳へと

人の声聞こえぬ雪の村を過ぐ

鳥誘ふ水に薄氷ありにけり

手入れする松葉の中の春の雪

高尾ひとみ

雨降るや窓辺に咲いて室の花

水仙の香れる庭や猫と居て

小鰻鶏の声しきりなる宮居かな

桜餅食べて女子会賑やかに

高々と春満月や船出づる

友達が置いてゆきけり蒨蕨草

まづかなオモチヤ散らばる春の庭

雨を背に耕してゐる農夫かな

湯上りの吾に近寄る春蚊かな

汁椀に花菜浮かせて朝餉かな

あざみ

医学部の裏手枯葉の積もりたる

三寒の樟の大樹のざはめけり

アスファルトに泥の靴跡小雪舞ふ

空つ風平和公園吹き抜くる

冬薔薇を見つバス待つ日中かな

高校へ坂道長き寒さかな

早春の近所の山を歩きたり

春浅き川を鴉の歩きたる

豆腐屋の音の近づく春の暮

春光や出入りの多き美術館

亜矢

ほの暗き瀬戸もまたよし春時雨

春の雪君のフードへ降り込んで

払ふのも惜しき白さよ牡丹雪

見上ぐれば紅白梅の蒼穹よ

梅が香のなかの散策きりもなし

故郷に寄せくる波のうらけし

春風へ路面電車と右折せり

卒業すチームカラーの花束と

蝌蚪掬ふ腸かくも柔らかく

春眠や吾子の口笛ほの聞こえ

綾乃

見上ぐれば日差しの中に春の雪

春雪にたゆたふ心静まりぬ

上り来て天満宮の梅園し

海の風仄かに梅の香が混じり

白梅に隠るるままの目白聞く

日溜りに猫の鳴くなり梅の花

街の音遠く聞こえて春野ゆく

野を駆くる犬を見守る春日かな

犬の子のふるつと振るふ春の雨

カフェラテをぐるぐるぐると春の風

井藤希

薄日差す空より雪の舞ひ降るる

玻璃越しに看護師と見る雪景色

雪を見てミルク多めの珈琲飲む

臘梅の一輪挿しの香りかな

紅白に咲いて香れる梅の花

三楹の咲く段々の畑かな

庭先に春蘭の咲く二十年

玄関を開けて優しく春の風

帰り際指差す先の春の虹

歌舞伎跳ぬ位いて笑つて春の宵

大畑恵

金縷梅やまだ濡れてゐる山の道

せせらぎの狭まるところ猫柳

川岸へ薄日の届き芒の芽

春みぞれ畑に芥を焚きをれば

畦草で拭うてをりぬ春の泥

日の届きけり庭隅のクロッカス

路地裏の奥まで日差し春めける

柚子の葉に春の露置く朝かな

土手を行く春田のつくところまで

春眠の夫傍らにバスの旅

暁子

初雪の遠嶺の裾は産土ぞ

郷へ行く村過ぐるたび雪深く

春の雪窓辺の我をめがけ降る

たびら雪かすかな風に向きを変へ

凍てゆるむ道に一筋水流る

里山の本々の残雪風に落つ

残雪でワインを冷やす若夫婦

改築の荷を持ち吾子来沈丁花

卒業子夢は内緒と我が耳に

リハビリを終へて吾子との春の海

すみれ

行く人に梅咲くところ聞きにけり

枝揺する鳥見つけたり梅林

梅の花ついはむ鳥を目で追うて

表見て裏に回りて枝垂梅

枝垂梅揺れたる枝の内に入る

水際に立てば寄り来る春の鴨

春泥を付けたる靴で夫帰る

春眠に笑顔の父の現るる

手に取りてかすかに匂ふ花ミモザ

しばらくはそのままにして落椿

知佳子

故郷で十年ぶりのとんどかな

とんどの火燃え盛る時到着す

激しき雪母と窓から見てをりぬ

吹雪く中子の劇遊び見に行きぬ

雪の降る錦帯橋を子と渡る

ちらちらと雪降り続く真昼時

風花の公園で子と鬼ごっこ

母が屋の母屋の裏に雪残る

春の雨一羽の鳥の鳴いてをり

赤き根の蒨葎草が夫は好き

ちどり

水仙の蕾ふくらむ雨上り

節分や子育て終へし家静か

白梅の二三咲きたる風の中

うどん啜る博多の街の余寒かな

料峭や電線に鳥あまた居て

子供らの声のしてをり鳥雲に

うららかや坂上りまた坂下り

残る鴨橋の上から見て過ぐる

トンネルを出でて車窓の山笑ふ

夫と会ふ葎大福手に持ちて

辻純江

咲き初めし水仙を剪り飾りけり

嫩らみを触つてみたる春の土

媼寄りばら壽司混ざる雛祭

白酒の杯に差す日を見つめたる

今年またいつものここで土筆摘む

固まつて生えたる土筆摘んでをり

竹の秋恩師の卒寿祝ひけり

病癒えし友と並んで蓬摘む

友と逢ひ話し込む間の春の虹

三日ぶり駆け寄る犬に春の風

雲雀

思うより桃色すぎて桃の花

百段に楽しみのある董かな

矢并を探す卒業式の宴

卒業の晴れ着の人が返事せり

ハイヒール脱いで麗かなる川辺

慈しみ深きを歌う新入生

麗かや老いも若きもカレーパン

銭湯を出れば日永の販売機

銭湯の湯気のはるかに春の月

春昼やまた川を見て郵便へ

ふじ女

北窓を開いて城の近くなる

ゆるびたる蕾よ開きたる梅よ

路地裏の奥へ奥へと梅香る

枝垂梅もう母居らぬこの家に

洋風の庭に変はれど枝垂梅

長閑なり庭の切り株に座してみる

看護師の辛夷咲いたと手招きす

がうがうと山荘裏の雪解川

春泥に足を取らるる子牛かな

春の月家を過ぎても歩きをり

松田裕子

食堂のメニューに添へて紙雛

雛あられ袋のままに配りたる

梅東風の鳴らす玻璃戸に庭木見る

白梅は枝に名残となりにつけり

篁を春風抜けて茶の畑

春の鶉鳴けば鳩みな飛び立ちぬ

楊貴妃の燈籠下の沈丁花

楠の洞語るやうなり目借時

水温む川石を跳ぶ男女かな

亀鳴くや紫色のスタジアム

村上正人

カンテラで覗く海面海鼠採り

節分草一両電車乗り継いで

梅園に群れて目白は枝渡る

往來の少なき通り桃の花

鴨引いて川は静けさ取り戻す

放棄地の叔母の田畑に蓬摘む

草餅の一つは明日に残したる

校庭でドッジボールや黄水仙

音のみが聞こゆる鯉月籠

間食で満たす小腹や蕨餅

森口良樹

金縷梅や軒に登五個干してあり

節分草夫婦連れが教へくれ

冴え返る山を歩けば人もなく

雨音の柔らかき朝雛祭

ひとり弾く卒業の歌音符追ひ

春愁や集めし石を眺むる夜

落椿娘と歩き拾ひけり

春の海漂ふ浮子に時が過ぎ

雨垂れを寢床で数へ春の朝

秋楡

靴の跡避けて新雪踏んでをり

奥へ行く野遊びの人腰に鈴

遠ざかる尾灯見送る春の宵

春日差すムスカリの咲く一とこ

確かむる桜の開花今日もまた

あたたかや食べ尽くされし餌付け台

レストラン開店の島花菜風

春夕焼踏切通る長き貨車

少年と犬へと芽花流しかな

山野ウタ

木蓮の盛りの紙のごときかな

夫の留守春雷の音しきりなる

見上ぐれば赤き椿よ山の寺

白椿しきりに落つる一日かな

蝶の居て馬酔木の匂ひしてをりぬ

滝音に高く咲きけり花櫓

春雷の過ぎて教室静まれり

春の日を日かな妊婦の眠りけり

桑門わかこ

色褪せしひひな金襴纏ひけり

啓蟄や久方振りのスニーカー

啓蟄や小雨の中をポストまで

盛鉢にふはりと木の芽ひとつまみ

耕せるビルの間の一区画

登山道瀬戸を眼下に花馬酔木

大原良子

息白し島へ行く船遠くなり

牡蠣を焼く町を通れる曇り空

冬夕焼歩道橋から眺めたり

冬の夜の吾子との時の早く過ぐ

駅へ行く電車を待ちて日脚伸び

如月の似島に寄せ波静か

土肥 律子

進めども変はらずそこにオリオン座

散歩する土手に田平子見つけたり

騒ぐ鳥そちらを見れば枇杷の花

枯草をちよこちよこして去る鶉かな

雪の舞ふ里山を抜け子に会ひに

節分に紙折り作る豆の箱

なつ

白梅に朝日ひと筋当たりけり

潮の香の微かに混じり春の風

うららかや犬に引かれて島散歩

曇天にふうはりと咲く桜かな

枝垂れたる先の先まで花満つる

幼子のポーズしてゐる花の下

撫子

満開の白梅ながめお茶を飲む

手前から島現はるる朝霞

軋みつつ車徐行す雪明り

足を止め菜の花畑ながめをり

一本の桜を眺め匂いかな

マフラーを外し申告会場へ

友達と桜並木を通り抜け

桜湯の桜丸ごと飲み干しぬ

しばらくは点滴見つめ冬の夕

落椿拾つて孫の首飾り

神社へと曲がる三叉路花馬酔木

点滴の落つるリズムで風花す

竹藪に筍二本見つけたり

霾るや万里の長城軽く越え

春の朝絶食を終へ重湯食ふ

河原静子

熊谷ゆり子

桜湯

観劇を終へて帰れる斑雪道

梅ふむ絵馬に願ひのぎつしりと

指揮棒の静かに止まる二月かな

内裏雛折りて見舞の品に添ふ

春雨のデモの行進見てゐたる

高梨英子

すれ違ふ母と子唄ふ雛まつり

白れんの蕾残して主去りぬ

ふるさとの妹と受く春の風

解体のビルに広がる春の空

指先に力入れ剥く夏みかん

やす保

路の臺ふたつ並んで賑らめり

残雪を持つて帰りぬ浜の人

厨に差す光眩しき春の朝

土筆摘み園児賑やかなる寺苑

紀英子

忌を修し僧も聞き入る初音かな

紅梅の膨らみはじぬ雨しとど

雛納済ませてよりの旅支度

雪柳雨の雫に揺れにけり

高嶋彌代

春泥が空地の一部占めてをり

木目込みの雛飾りはや四十年

玄雛に一刀彫の削り跡

民

紅梅のひときは目立つ通りゆく

窓越しに聞こゆる音よ春うらら

麗かや響き渡れる子らの声

古川廣子

梅の香に行きも帰りもひと休み

風光る姿勢を正し歩きけり

光ある春の川面に足止める

みさ子

花辛夷自転車を止め眺め入る

春うらら子は縦抱きを好みけり

山崎桂子

令和七年二月度作品集より

高尾ひとみ 私の選んだ十句

裸木の美しきかな神の山
海に出る丸く大きな春の月
父の血が我を沸かすや阿波踊
岩滝山の色を失ふ寒さかな
うすらひの芹採る谷に風の吹く
登つては休んでは梅探りけり
轉に近寄れば皆飛び立てり
玄冬や近江の旅を懐しみ
侘助や風呂を入れつつ一人酒
芽吹くとき野良に槌打つ人の影

佐保光俊
あざみ
綾乃
井藤希
大畑恵
暁子
知佳子
雲雀
森口良樹
秋楡

森口良樹 私の選んだ十句

裸木の美しきかな神の山
酒蔵を閉づと貼紙花八手
ことのほか静かな空に雪の降る
うすらひの芹採る谷に風の吹く
待春の瀬音確かや谷伝ひ
絶え間なく水の音して斑雪
寒雀ドレミドレミと跳ねてをり
春近き一番ホーム風抜くる
宵星と共に滲んで春の月
如月や眼鏡頼みに毛鉤巻き

佐保光俊
高尾ひとみ
井藤希
大畑恵
暁子
知佳子
辻純江
松田裕子
村上正人
秋楡